

「沖縄研究と障害学との対話——アイデンティティと当事者性を中心に」

障害学会シンポジウム@沖縄国際大学
龍谷大学社会学部准教授 岸政彦
2014.11.9 (日) kisi@soc.ryukoku.ac.jp

0. いままでやってきたこと/いまやっていること

沖縄論、部落問題論、生活史方法論

『同化と他者化——戦後沖縄の本土就職者たち』(2013、ナカニシヤ出版) / 『街の人生』(2014、勁草書房) / 『朝日のあたる街——都市型被差別部落の変容』(仮)(齋藤直子と共著、2015予定、ナカニシヤ出版) / その他

本シンポジウムでの課題 「沖縄研究と障害学との対話——アイデンティティと当事者性を中心に」とりあえず、自分が沖縄をテーマにして、何をどのように描いたかについてお話しします。

1. 沖縄をどう描くか

- ・ 沖縄研究 (1) 基地と沖縄戦 (2) ポストコロニアル研究 (3) 思想史・文学 (4) 伝統文化・自然・観光…… (20) 社会学的「アイデンティティ」「共同体」研究
- ・ 沖縄のアイデンティティと共同性に対する「ロマンチックなイメージ」。政治的立場に無関係。日本人の沖縄に対する「罪悪感」? 沖縄人の日本に対する「反感」?

2. 『同化と他者化』

『同化と他者化——戦後沖縄の本土就職者たち』(ナカニシヤ出版)は、戦後、復帰前の沖縄から本土就職し、その後沖縄へUターンしてきた人びとがまさに「異口同音」に語る定型的な語り——「本土はあこがれの場所であったし、本土の生活は楽しく差別もされなかったが、やはり故郷が恋しくなって、結局向こうには居着かずに戻ってきた」——が、そもそも、いったいなぜどのようにしてそのように「定型的」になってしまうのかを検討した本であった。そこで見出されたのは、「戦後の本土就職で起きたことは、むしろ日本人になるうとして逆に沖縄に「アイデンティティのUターン」を招いてしまったという、矛盾するプロセス」。すなわち、「同化」(「日本人化せよ」という権力作用が、結局は「他者化」(「沖縄人化せよ」という矛盾を生み出さざるを得なかったという現実である。 / 「同化」を強いられる経験を経ることで、「自分はいったいなにものなのか」が問い直され、結果的に「他者化」が起こるということ。(シンポジウムの趣旨文より)

3. 問題としての「本土就職」

- ・ 「他者性」はどうやってつくられるのか。それは沖縄という「特殊」な場で継承されてきた「文化的DNA」か。
- ・ 近代社会に対する批判のために沖縄を参照→沖縄の文化やアイデンティティを「本質化」
- ・ 私たち日本人は、沖縄が「特別な場所」で「あってほしい」
- ・ 地域的アイデンティティの強さ、共同体の温かさ、伝統的文化の継承……すべてが「日本的でないもの」として語られる。
- ・ しかし、この「特別であること」は、どのように「つくられた」のか
- ・ テーマは「戦後の本土就職」。集団就職や単身就職などで、60年代の沖縄から大量の若年労働者が本土に流出し、日本の都市で暮らした。沖縄の歴史上でもっとも大規模な「日本との出会い」
- ・ 後にほとんどがUターン
- ・ よくある語り「貧しい沖縄から売られるように本土へ行って、そこで差別されて帰る」という物語

- ・あらゆる統計データが、復帰前の沖縄の好景気を示す。つまり当時「沖縄にも仕事はいくらでもあった」
- ・調査で得られた「ノスタルジックな語り」＝「憧れの本土、東京時代は楽しかった。でも本土で沖縄的なものの良さを再発見した」
- ・なぜ「憧れの本土」でかれらは「日本人」にならなかったのか？

4. アイデンティティとは何か

- ・歴史的資料などから、当時の本土就職が、琉球政府と日本政府によって制度化された「つくられた移動」「もうひとつの復帰運動」だったことを明らかにした
- ・単なる労働力移動ではなく、「祖国日本との一体化」として位置づけられた。それは「日本人になる」ための回路として、重い意味を付与されていた。だが、ほとんどの移動者が後にUターンする
- ・アイデンティティとは、特にマイノリティの場合、「なにかに所属している」という事実ではなく、「私とは一体誰だろう」という問いかけの感覚
- ・その意味で、マジョリティにはアイデンティティは「無い」。一方でマジョリティのアイデンティティが、他方でマイノリティのアイデンティティがあるのではない。一方で、アイデンティティについて「何も考えない／問われないで済む」人たちがいて、他方で「私（たち）は一体誰だろう？」という果てしない問いかけのなかに投げ込まれる人たちがいる。
- ・「おまえは誰だ？」と問われ続けている状態においては、「アイデンティティを問われない状態としてのマジョリティ」に同化することは（原理的に）できない。
- ・「同化したい／同化せよ」という圧力は、「私についての問いかけ」を継続的に「思い出させる」。したがって、それはむしろ「私たちは／おまえたちは異なる存在である」というメタメッセージを強化してしまうのではないか？
- ・本書の結論「同化圧力のもとでは、民族的同化は不可能」
- ・このことを、生活史の語り、新聞記事、統計データ、歴史的資料、行政文書などから描いた
- ・（ただ、「立証」するまでには至っていない。結論としてこのような仮説を索出した）

5. 何をどう書きたかったのか

- ・上記の「他者性の感覚」としての沖縄アイデンティティを本質化しない
- ・だが、それはメディアなどによって「構築」されたフィクションでもない
- ・27年間の米軍支配→復帰後も続く差別的政策という、本土とは明らかに異なる「歴史」と「構造」がもたらしたものとして「沖縄的なもの」を考える

6. いまやってること

- ・沖縄の「共同性」における階層格差のエスノグラフィ。「沖縄的なもの」を産業構造や階層構造から説明。

補足. 「当事者性」について

- ・時間があれば。あるいは討議の時間にも
- ・「ナイチャーになにがわかる」vs「沖縄のことを研究してくれてありがとう」
- ・当事者性に関する議論がなぜ「哲学的」になってしまうのだろう？
- ・当事者／非当事者の区別は、あるときは「構造的に変わらない」ともとされ、ある場合には「調査の現場において揺れ動く」ともとされる。
- ・「区別」の話と、「その区別が問題になるのはどのような状況か」の話を混同。あと「調査現場」からそろそろ離れよう！
- ・当事者／非当事者の区別は、ある特定の場を除いて、消滅したり移動したりすることは「ない」。しかしそれが「どれくらい問題になるか」は、状況に対して相対的